
夜桜

たかみゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜桜

【ZPDF】

Z0792F

【作者名】

たかみゅう

【あらすじ】

花見をするために公園へ連れられてきた少年の、幻想めいた出会いの話。

(前書き)

あまつ『B』、『B』はしてこません。

いくつもの提灯が闇を照らし、桜の白い花弁を浮き上がらせている。頭上で美しさに対抗するように、地上では賑やかに繰り広げられる宴。

少年は、父親に連れられてこの場を訪れていた。

足元の青いビニールシート。先に準備していた母親達が、各々（オノオノ）の腕を振るつた料理が華やかな彩りを添えている。

他家の者も続々（ゾクゾク）と顔を見せていた。各々（オノオノ）が靴を脱ぎ、シートの上に座つて行く中、大人達は久々（ヒサビサ）の顔合わせに、かなり盛り上がりつつているが、少年にとつてはおもしろくない。彼はおもむろに立ち上がり、靴を履く。

それに気付いた彼の父が、酔いのまわりかけた明朗な声で呼び掛けた。

「遠くには行くなよ！」

少年は片手で応えると、公園の奥、人気の少ない方へと足を向けてた。

昼間は一人でよく訪れるこの公園も、夜は全く違う趣を醸し出している。少年は電灯も少なく、人気の全くない、小さな広場になつてている場所にたどり着くと、小さな溜息を吐いた。

彼は一人で頭上を見上げると、久々（ヒサビサ）に恋人と逢つたかのような微笑みを浮かべ、ひとりごちる。

「静かだな」

桜は応えるように、ひらひらと華を散らした。

白い花弁が辺りを舞う中、肌寒さを感じながらも、うつらうつらと舟を漕ぐ彼は、どこか遠くに邪氣の無い高い声を聞き、はつと顔を上げる。

見覚えの無い、同世代の子供の姿が、その目に映つた。少年は微かな怒りに眉を寄せ立ち上がる。

無言で歩み寄る少年の気配に気付き、桜を注視していた子供は、体ごと顔を少年に向ける。黒目がちの大きな瞳に鋭い視線を向けてまま、少年は立ち止まつた。子供は小首を傾げ、少しだけ自分より背の高い少年を、あどけない目で見つめ、口を開く。

「こんばんは！」少年は相手の不意打ちに似た挨拶に、驚き、目を白黒させる。彼は上背があるうえに、かなりの暴れ者だつた為、同年輩からは避けられていたのである。その為、相手から話し掛けられたのは、これが初めてだつた。

「こん……ばんは」驚きのあまり、詰まりながら挨拶を返す少年に向き合つたまま、子供は口許に笑みを浮かべ明るく名乗る。

「僕、怜つていうんだ」少年は頭の中でぐるぐると考えを廻らせ、返す言葉に悩んだが、無下に扱つて鬱陶しい状態に陥ることを恐れ、怖ず怖ずと呟くように名乗つた。

「此処の桜、綺麗だねえ」自分的好きな光景への贅辞に、頬は嬉しさを覚えて、思わず笑みを零し、声を弾ませる。

「だろ？」俺、この公園で此処が一番好きなんだ！」怜は二コ二コと微笑みを浮かべたまま、その広場で最も枝振りがよく、幹の太い樹に向かつて歩き出す。なぜか離れたくないとい

う感情を抱いた頼は彼の数歩後を、追うように歩く。

堂々（ドウドウ）と枝を張り、すつと背筋を伸ばして、無数の華を咲かせている桜。その前で怜は振り返り、頼に視線を向ける。

「この桜、吸い込まれそつた程、綺麗」
頼は怜の視線と声から不安を嗅ぎ取り、口許を歪める。

「怖いなんて、言うんじやねえだらうな？」
頼が揶揄うと、怜は素直に頷いて、再び桜を見上げる。
華ははらはらと一人の上に降り落ちて、地面に白い絨毯を敷いていく。

「凄く綺麗だけど、少し怖い」
怜の咳きに呼応して少し風が強まつたように感じ、頼は思わず後退りしてしまう。

「どうしたの？」
頼ははつと目を開けると、慌てて怜の身体を離し、その場から跳び退いて乾いた笑いを漏らす。

「何でもねえよ」
頼が強がつた台詞を吐くと、怜は体ごと振り返り、首を傾げて訝る。

それを見て、頼は慌てて空を見上げ、嘯く。
「あー、俺、戻らねえと……」

背を向け、駆け出した頼を視線で追いながら、怜は、我知らず微笑みを浮かべていた。

「僕も、そろそろ帰つた方がいいかな？」
目を弓形に細め、怜は、頼が走り去つた方向とは反対側へと足を向けた。

桜（桜）はただ、静かに華を散らし、その場に佇む。

それから数日後、新学期の教室で一人は再会したのだが……。

「新しいお友達の、如月怜君です」
頼はホツとしたような、少し残念なような微妙な気分に襲われ、
丸一日を難しい顔のまま過ごしたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0792f/>

夜桜

2010年10月8日14時41分発行